

●厚生労働省編一般職業適性検査 (GATB)



GATBは、認知機能、知覚機能、運動機能11種類の尺度により多面的に能力適性(適性能)を測定し、個人の個性を能力面から把握することができ、検査。妥当性、信頼性があり、標準化されているため全体の中の個人の相対的な位置がわかるようになっている。学業とは違った視点で生徒を客観的に評価でき、職業や進路の方向性をアドバイスしやすい。

測定された能力適性の結果は、職業領域、適性職業群の所要基準と照合され、高い適性能と関係の深い仕事ができるので、職業とのマッチングに基づいた職業探索ができる。

フィードバックする面談の場合では、まず検査の結果をわかりやすく伝える。プロフィールの山と谷で得意・苦手な領域を指摘し、自分の強みや良いところに気づかせるようにする。それを裏づける体験やエピソードが引き出せると自己効力感が高まる。そして、個性を活かせそうな進路や職業の方向性などを説明する。

その際、本人の感想や考え方を聴きながら、日頃の学業、部活動や日常生活の様子、家族の希望や考えなどを合わせて、総合的に判断していく。希望に添いつつ得意な適性能を組み合わせて活かせるような職業群を示すようにする。

点数の高低にあまりとらわれず、個人差よりも個人内差(本人の中での能力ごとの高さの差)を重視するように心がけることがポイントである。

4～5ページに個人結果プロフィール、
6～7ページに面談内容の事例

特集

GATB、VRTを いかに活用するか 高校生編

人と職業のマッチングを規定する条件として、スーパー(Super, D. E.)は職業適性という概念を示した。職業との関係において個人の特性の要素を分類した概念であり、自己理解のためにはそれらを知る必要がある。能力の中の一つとして「適性」、パーソナリティの中の一つとして「興味」があり、それらを測定するのが、厚生労働省編一般職業適性検査(GATB)と職業レディネステスト(VRT)である。

■スーパーの職業適性概念

職業適性	能力	適性	知能
			空間視覚化
			知覚の速さ・正確さ
			精神運動機能
	技量	適応力	未開発のもの
			学力
パーソナリティ	価値観	興味	技能
			欲求
			特質
		態度	

●職業レディネステスト (VRT)



VRTは、①職業に対する興味の傾向(その仕事をやってみたいか)、②職業に対する自信の傾向(その仕事をうまくやる自信があるか)、③日常生活における志向性(日常生活行動や意識がどのような方向を指しているか)をA、B、Cの3つの検査で測定することで、進路選択・職業生活への準備状態(職業レディネス)を把握する。キャリア教育に不可欠な自己理解と職業理解に効果が期待できる。

例えば、検査結果を見てそこに書かれた職業名に触れることで、「自分はいかに職業のことを知らないか」に気づき、自分の興味に合わせた職業探索へと進むきっかけとすることもできる。

興味と自信の高さが違った場合は、その意味を考える。自信は経験値に基づくもの。例えば、興味は高いが自信が低いという場合、何かの経験の記憶が影響して自信を失っていることもあり得る。

また、本人の希望と検査結果が乖離している場合、職業理解が一方的で偏っている可能性もある。一つの職業には多様な仕事がある。一つの仕事には多様な要素がある。知識が少なかつたことによる誤解やギャップだったかもしれない。

テスト結果が見える形で示されることで、漠然と思っていた進路が自分に合っていると自信につながる。それまで気づかなかつた分野に可能性が広がる効果もある。学校生活をはじめ環境や個人的背景等、できるだけ全体像を見ながら、未来志向で一緒に考えていく。

8～9ページに個人結果プロフィール、
10～11ページに面談内容の事例